

横山蘭畹考

——近世後期金沢の女流詩人——

はじめに

牛田きぬ 横山蘭畹考

近世後期の有名な女流詩人といえ、頼山陽の弟子の江馬細香や梁川星巖の妻の梁川紅蘭が挙げられる。一方、目立たぬ存在であったが夫から手ほどきを受け、徐々に詩作の腕を挙げていった女流詩人がいた。名は、横山蘭畹といい、加賀藩の家老横山致堂の妻である。刊行詩集は『続香集』一冊のみであるが、その他、嫡子政和の筆写と編集による写本の中に詩が残されている。⁽¹⁾

致堂は一万石の本身であったが、漢詩を善くした。江戸藩邸詰めとなつたため、幾度か金沢の邸宅を留守にし、その際、蘭畹は国元で孤閨をかこちつつ家を守らざるを得なかつた。

蘭畹は後妻である。致堂には加賀小松地方を襲つた地震のショックにより二十一歳という若さで第一子を未熟児を生み、ほどなく母子ともに早世した先妻の蘭蝶がいたからである。致堂の詩集の中には先妻蘭蝶を悼む詩が残されており、また自分の詩百首と亡き先妻蘭蝶の詩百首を合わせた詩集『海棠園合集』⁽⁴⁾も出版している。このことからわかるように、先妻蘭蝶への致堂の思いは深かつた。

牛田きぬ

揖斐高氏は「海棠の花、蘭の香り——近世後期漢詩における夫と妻」〔近世文学の境界〕二〇〇九年二月 岩波書店)の中で、蘭畹は先妻蘭蝶の身代わりであつたという論を展開している。また致堂には錦雲という妾もいた。蘭畹を娶つて後のことである。

蘭畹は人生の時々において、女性として心揺れながらも詩作に励んでいた。そんな様子を詩や書簡等から読み取ることができる。そのような蘭畹にとつて、詩とは一体何だったのであろうか。本稿では横山蘭畹の人となり进行を明らかにしつつ、その問題を考えていきたい。

一 夫横山致堂とその家族

横山致堂は、名は政孝。字は誼夫、通称は小五郎・多門・図書・藏人という。致堂は号である。寛政元年(一七八九)に金沢で生まれた。家禄一万石の代々金沢藩の家老をつとめる重臣である。父政寛、祖父政礼は、共に詩文を善くし、致堂も早くから詩に専心した。享和元年(一八〇一)に父政寛が三十二歳で早世し、十三歳で家督を継ぐ。文化五年(一八〇八)二十歳で家老となり、加賀藩土津田

政本の女、桂と結婚。後に号を蘭蝶と名付ける。蘭蝶歿後の文政元年（一八一八）、二十九歳の致堂は、後妻蘭腕を娶り、蘭腕のために小閣を営み、その名を静好閣と名付ける。天保七年（一八三六）に江戸で歿す。四十八歳であった。

先妻横山蘭蝶は、寛政七年（一七九五）に生まれた。加賀藩土津田政本の女、名は桂、字は依之という。文化五年（一八〇八）十四歳で致堂に嫁ぐ。後に夫から漢詩を学ぶ。文化十二年（一八一五）一月二十一日加賀小松を襲った強い地震のショックにより、妊娠八か月で未熟児をいったん生み、母子ともにこの地震の四日後の一月二十五日に二十一歳という若さで歿した。

致堂の後妻として迎えられる横山蘭腕は、文化二年（一八〇五）金沢で生まれる。加賀藩家老の横山隆誨の女。名は蘭という。蘭腕は致堂がつけた号である。文政元年（一八一八）十三歳で致堂（当時二十九歳）と結婚。先妻蘭蝶と同じように夫より漢詩を学んだ。天保五年（一八三四）蘭腕三十歳の年に致堂と蘭腕の間に嫡子政和が誕生する。⁽⁶⁾同年、詩集『続香集』を出版。文久三年（一八六三）致堂歿後二十七年目（文久三年）十一月二十五日に五十九歳で歿した。

侍妾（侍女）錦雲は深山氏、名は鵬羽、字は金衣、号は錦雲という。天保元年（一八三〇）当時、十四歳で致堂に妾として仕え、天保三年（一八三二）致堂との間に女兒美珠を生むが、天保四年（一八三三）秋、美珠を亡くし、その後を追うように錦雲も十月十九日に歿した。十七歳という若さであった。

写本『先考致堂府君遺文⁽⁷⁾』には致堂の書いた「続香集序」が掲載され、ここに蘭腕の伝記的事実が書かれている。この一部を紹介する。（これは、詩集『続香集』には収められていない）

蘭腕は余の継室なり。丁丑（文化十四年）の春、年十三才にして余に帰ぐ。既にして余、東行の役有り。戊寅（文政元年）の夏、家に還る。始めこれに読書を教ゆ。是よりして奩具の側、細帙を陳べ置き、手に巻を積かず。猶ほ昔日の蘭蝶のごときなり。
（原漢文）

「奩具」は、化粧道具。「細帙」は、浅黄色の布で覆った帙、つまり漢詩関係の書物をいう。「積巻」は、書物を手から離して置く。

蘭腕は化粧道具の傍に漢詩文集を並べ置き、それらの書物を手から離すことがないほど努力を重ねたという。蘭腕の熱心な勉強ぶりを致堂は「猶ほ昔日の蘭蝶のごときなり。」とも記している。当時蘭腕は十三歳、致堂と結婚後まもなく、夫の勧めに忠実に従ったのである。致堂は、蘭腕のこのときの姿を亡き蘭蝶と重ね合わせている。

蘭腕の名は、先にも記述したが、偶然にも「蘭」という名前であった。致堂は「続香集序」の中で、この命名法についても触れ、「豈に奇遇と謂はざるべけんや」（原漢文）と書いている。つまり、娶った後妻の名が「蘭」であったことに不思議な縁を感じたのである。そして、随分先のことになるが、蘭蝶の後に続くようにと願いを込め、蘭腕の詩集を『続香集』と命名をした。掛斐氏は先行論で

当時の蘭畹のことを「致堂にとつて後妻蘭畹は、前妻蘭蝶との間で見果てなかつた夢を見続けるために必要な身代わりであつた。蘭畹の詩集名『続香集』は、蘭蝶の『断香集』がそうであつたように、夫致堂の名づけたものであろうが、こうした命名法にも、致堂の心中における前妻蘭蝶と後妻蘭畹の位置関係がよく表れている。」と述べている。

二 蘭畹 詩の特色① 寄外詩の多作

蘭畹は後妻であつたからなのか、人々に知られなかつたように思われる。というのも、もともと蘭蝶と蘭畹に関する資料等は少なく、その上、蘭畹の情報量は蘭蝶よりはるかに少ないものであつた。致堂が蘭畹を娶る前、すでに先妻蘭蝶との詩集『海棠園合集』を出版しており、早世の詩人として蘭蝶の名の方が知られているのが一因かもしれない。蘭畹の唯一の詩集『続香集』は、蘭蝶の詩集『断香集』の八年後、天保五年（一八三四）蘭畹三十歳のときに出版された詩集であつた。『加能郷土辞彙』の横山蘭畹の項には、『続香集』が、『続断香集』と誤つて記載されているほどである。出版されたものの、お屋敷に住む大身夫人の漢詩集ということで、一般の人々の目に触れにくかつたと考えられる。

しかし、蘭畹は蘭蝶と比べて、詩作の上では、致堂との結婚生活の長さと同比例するかのよう、努力を重ね、熟達した詩を作つていった。技巧的な表現を駆使するなど、夫への深い愛情を表現しようとする自分に言い聞かせるかのようであつた。

致堂は、親交の深かつた大窪詩仏に『続香集』序文を依頼したが、それには「其の詩、清婉独絶。予其の人を見ずとも、其の詩を讀みて其の才を愛す。宜しき哉、琴瑟相諧ひ、金石相和す。」（原漢文）と蘭畹の詩は評されている。蘭畹には会つた事は無いが、その詩は清く優しく、特に優れたもので、その才能は愛すべきものである、そして夫婦仲が良く、夫の作っている詩と調和されているという意で、蘭畹の詩を非常に高く評価したことがわかる。致堂は先妻の蘭蝶と同じように、いやそれ以上に後妻の蘭畹にも詩の手ほどきをし、蘭畹の詩集を出版させたのである。

数少ない周辺資料の中にも『金沢市教育史稿』には唯一の刊行詩集『続香集』について、次のように記されている。「其詩集は文政九年より天保二年に至る間に賦する八百三十首より二百餘首を撰びしものなり」^⑩。厳選された詩集であることがわかる。まずその特色から見てみることにする。

蘭畹の詩には、とりわけ離れて暮らす夫を恋しく思う「寄外」詩や「答外」詩（外に寄す・外とは夫のこと）等、夫致堂を思う詩が多いことが特色である。特に『続香集』には蘭畹の詩が計二百二十三首（巻上には百十三首、巻下には百十首）収められているが、そのうち四十九首（巻上には八首、巻下は四十一首）が「寄外」詩なのである。

揖斐氏も先行論で「夫のことを詠む詩、また夫に寄せる、いわゆる「寄外」詩の数が異常といつてよいほど多く、しかもそれらは熱烈な愛情を表現するものが少なくない」と述べているが、蘭畹は

なぜ、こんなにも多く夫を思う詩、「寄外」詩を詠んだのであろうか。

『続香集』巻下に掲載されている天保元年（一八三〇年）〜天保二年（一八三一）、蘭畹二十六〜二十七歳の時に作った「寄外」詩から四首見ることにする。

第八十一首目〜第八十四首目に掲載されている「寄外」詩である。なお連作なので、第八十二首目以降は「又」という表記となる。

寄外 外に寄す

夜半燈前転悄然 夜半燈前転た悄然

深閨寂寂未成眠 深閨寂寂として 未だ眠りを成さず

那堪枕上思人涙 那ぞ堪えん 枕上 人を思ふの涙

無奈離愁又一年 奈んともする無し 離愁又一年

韻字 然・眠・年（下平声一先）

第一句目の「転」は、程度が次第に深まる。「悄然」は、憂い悲しむさま。第二句目の「深閨」は、婦人の奥深い寝屋。「寂寂」は、さびしく静かなさま。前半は「夜になると、寂しくてなかなか眠れません。」という意である。第三句目には「この寂しさをどのようにして堪えたらいいのでしょうか。」と離れて暮らす夫を恋しく思いながら涙にくれている。その涙の訳は「いかようにも対処することできはしません。離れて暮らす悲しみ、また一年経ってしまいました。」と繋がる。

第二句目の「深閨 寂寂として 未だ眠りを成さず」や第三句目の

「那ぞ堪えん 枕上 人を思ふの涙」は、非常に直接的な表現で、夫に訴えかけるようである。蘭畹が夫を恋しく思う気持ちは、日ごと募ってくるのだ。

又（寄外）

社後新暄漸可衣

春光又看柳依依

独凭雕檻無聊頼

燕子归来人未帰

社後の新暄 漸く衣に可なり

春光 又看る 柳の依依たるを

独り雕檻に凭れて 聊頼無し

燕子帰りに来て 人帰らず

韻字 衣・依・帰（上平声五微）

第一句目の「暄」は温暖である。第二句目の「依依」は、枝のしなやかなさま。「雕檻」は、細かく彫刻の施してある美しい欄干。「聊頼」は、安心して頼りにするという意である。第三句目から第四句目にかけて、蘭畹は、ひとり美しい欄干に凭れつつ、燕は帰ってくるのに頼れるあなたは帰ってこないと悲しく思っているのである。

また、次の「寄外」詩の第四句目には、蘭畹の将来の希望が詠まれている。

又（寄外）

水沈不炷簾高捲

窗外細梅香滿枝

君更天涯又留住

何時並坐共論詩

水沈 炷かせず 簾は高く捲く

窓外の細梅 香 枝に満つ

君は更に天涯 又留住す

何れの時か並坐して共に詩を論ぜん

韻字 捲は踏み落し 枝・詩（上平声四支）

第一句目の「水沈」は沈香の別名。「炷」は、焚く。第二句目の「細梅」は浅黄色の梅。第三句目の「天涯」は故郷を遠く離れた土地の意である。第四句目の「何時並坐共論詩」は、杜甫の五言律詩「春日憶李白」の「何時一尊酒 重與細論文」（何れの時か一尊の酒、重ねて与に細やかに文を論ぜん。）が意識されている。大意は、「沈香も焚かず、簾は高く巻いています。窓の外には浅黄色の梅の花が咲き、その香がしています。あなたは遠いところ（江戸）に留まっています。ああ、いつの日か二人並んで、共に詩を論じあいたいものです。」となる。蘭畹の叫びともとれる訴えである。

最後に紹介する「寄外」詩は、寂しさの極みともとれる詩である。

又（寄外）

簾垂春事捻蕭然 簾垂れて春事捻て蕭然

針線抛来倦又眠 針線抛ち来りて倦て又眠る

覚後更無他事在 覚めて後 更に他事の在る無し

閑看香篆結輕煙 閑かに看る 香篆 輕煙を結ぶを

韻字 然・眠・煙（下平声一先）

第一句目の「春事」は、春の楽しい事柄。「蕭然」は、ものさびしいさま。第二句目の「針線」は、縫い針と縫い糸。裁縫のこと。

第四句目の「香篆」は、香爐の煙のことで、篆文のようにたちのぼるからという。

大意は、「あなたと遠く離れていることがただ寂しくて、春の楽

しい事柄ものさびしさを感じ、裁縫の仕事もやめて一眠り。目覚めても、あなたが傍に居ないから何もする気になれず、香の薄煙が篆書のように立ち上り、その煙りが結ばれるさまを閑かに見えています。」となる。

以上は、蘭畹の『続香集』に掲載されている「寄外」詩の一部である。これらの「寄外」詩には、蘭畹の致堂に対する思いが直接的に表現されていることが多いことが分かる。蘭畹が「寄外」詩を多作したのは、おそらく夫致堂に対して、より自分の方へと関心を向けさせようと必死だったからではないかと思われる。後妻蘭畹を娶ったのは、蘭蝶の歿後二年の文化十四年（一八一七）であり、致堂は先妻蘭蝶との美しい思い出を胸にずっと抱いていたと考えられる。致堂が亡き蘭蝶の遺した詩集『断香集』を出版したのは文政九年（一八二六）で、蘭畹が致堂から言われるままに詩と向き合っている間も、致堂は亡き蘭蝶の詩を整理していたのだった。その後、『断香集』の選詩と加評を親交のあった江戸の漢詩人、大窪詩仏¹¹に依頼するほど、蘭蝶への哀悼の気持ちは消えずにいたのである。致堂は、これらの行動を蘭畹に隠れてしていたのかどうかは定かではない。しかし死別後二年しか経過していない致堂に嫁いだ蘭畹は、まだ幼かったとしても、おそらく致堂の気持ちに理解があったのではないだろうか。

そう多くはないが、先妻蘭蝶も「寄外」詩という題で夫への思いを詩に詠んでいる。致堂の蘭蝶への変わらぬ愛情に対し、蘭畹は多

少なりとも意識をして、先妻蘭蝶より多くの「寄外」詩を多作し、「私もあなたのことを思っています。」と致堂への愛情を詩に込めて伝えたのではとも考えられる。

それに加えて、このように、直接的な「寄外」詩が多作された背景には、当時流行した詩風が関係しているとも考えられる。当時の詩風とは、「江戸の山本北山は『作詩志毅』を著し、詩は宋詩のように平明な言葉をもって、清新な心情や日常の情景を読まなければならぬ」と説いた。京では、頼山陽たちがこの詩の革新運動を広げた。日常生活を題材にとり、わかりやすい言葉で実情、実感を詠むという新詩運動が多くの詩人の心をとらえた。¹³とされるようなものであった。蘭腕が直接的ともとれる「寄外」詩を多く詠んだのは、いわば時流に添って、素直な気持ちを詠んだものであるとも考えられる。

もちろん、それは致堂の熱心な指導によるものと蘭腕の日々の努力の積み重ねであることは言うまでもないが、年月の経過により詩作の腕が向上したとことと比例して、徐々に妻としての自信が現れ始めたからである。

「寄外」詩は『続香集』の他、嫡子政和の筆写・編集をした写本類にも多く見られる。¹⁴致堂は蘭腕を娶った後、蘭腕のために居室静好閣を築造しているのだが、その名称をつけた「静好閣遺草」と『静好閣百律』という写本である。これらにも『続香集』と同様、静好閣で詠んだと思われる致堂と離れて暮らす日々の様子、また致堂を恋しく思う蘭腕の率直な気持ちを詠んだ詩が収められている。

『静好閣遺草』は、天保四、五年頃（一八三三、一八三四）嘉永四年（一八五一）の詩五十八首を収める。このうち夫を思う詩「寄外」詩は十九首も収められている。また『静好閣百律』は、天保二年（一八三一）～六年（一八三五）の蘭腕の五言律詩二十一首が収めているが、このうち夫を思う詩「寄外」詩は、八首も収めている。いずれの「寄外」詩にも、「あなたが傍に居なくて寂しい」という蘭腕の率直な思いが溢れている。

三 蘭腕 詩の特色② 意欲作への挑戦

『続香集』のもう一つの特徴としてあげられるのが、巻上に「銷夏の吟三十首」という七言絶句の連作が収録されていることである。上平声一東から下平声十五咸まで三十種類の韻目を用いて作詩した意欲作である。このことから蘭腕は難しい事にも果敢に挑む、大変な勤勉家であったことが推測される。まさに「奩具の側、細帙を陳べ置き、手に巻を積かず」と致堂が『続香集』の序文に書いたの通りなのである。

次に挙げる詩は、『海棠園合集』に収められている蘭蝶の詩である。十代後半の作ということもあり、若妻の初々しさが感じられる。

理粧 粧を理す

洞房自起不禁粧

洞房自ら起きて 粧に禁へず

梳罷衣裳好称身

梳り罷みて 衣裳好し身に称ふ

何学双眉画時様

何ぞ学ばん 双眉時様を画くことを

還含微笑問傍人 還た微笑を含みて 傍人に問ふ

韻字 響・身・人（上平声十一真）

「洞房」は婦人の部屋。「響」は顔をしかめる。「不禁響」は、「西施の響みに倣う」の故事。（美人の西施が、病気で顔をしかめたところ、それを見た醜女が、自分も顔をしかめれば美しく見えるかと思ひ、まねをしたという『莊子』天運の故事。）「時様」は、当時の流行の形。「傍人」は、かたわらの人。ここでは傍に居る夫致堂のことと考えられる。

この詩で特に注目すべきは、後半の第三句目と第四句目である。

化粧をする上で最も重要な部分である眉、この眉を描く形については当時の流行を追うのではなく、傍りにいる夫に尋ねてみたいという、何とも可愛らしい若妻の一面が垣間見られる詩となっている。

この蘭蝶の「理粧」の詩を意識した詩が『続香集』の卷上「銷夏吟三十首」中の次の一首である。

洞房睡起不勝響 洞房 睡起 響に勝へず

自把粉綿揩鏡塵 自ら粉綿を把りて 鏡塵を揩う

理得宿粧依旧様 宿粧を理し得て 旧様に依る

何ぞ須ひん宜称 傍人に問ふことを

韻字 響・塵・人（上平声十一真）

「粉綿」は、鏡の汚れを拭き取るもの。「宿粧」は、化粧の残り。「宜称」は、宜しい状態。「傍人」はかたわらの人。化粧の仕上がりをわざわざ傍に居る人に聞く必要はないと言っている。

この強気とも取れる詩は蘭畹の嫉妬心なのであろうか。揖斐氏は先行論で「用語の共通性から見て、おそらく後妻蘭畹は前妻蘭蝶のこの詩を明らかに意識しつつ右の詩を作ったのではあるまいか：中略：後妻蘭畹は前妻蘭蝶への対抗意識を、結句の表現の中にはつきりと刻み込んでいるのである。」と述べているが、この「銷夏吟三十首」は、先にも述べた通り、三十首韻字をわざわざ変えて作らなければならぬという詩を作る上の制限がある中で作ったものである。蘭畹は、この一首くらいはと、先妻の蘭蝶を意識した詩を遊び感覚で作ってみたのではなからうか。

揖斐氏も先行論でこの二つの詩を「前妻蘭蝶の若妻らしい初々しさ、後妻蘭畹の妻としての自信」と対比しているが、妻としての自信をあえて、この場で表現するように、余裕をもってこの詩を詠んだと考えられる。言うならば蘭蝶の詩を少し細工して、創作的な詩として表現したと捉えることもできよう。そして第四句目の「傍人」という意は、辞書的には「かたわらの人」という意である。蘭蝶の詩は夫致堂が傍に居る時の詩と考えることができるが、蘭畹の詩の場合は夫致堂とは限らず、侍女ではないだろうか。なぜなら、致堂は国元を離れ江戸の藩邸に詰めており、蘭畹は金沢の邸宅で夫の帰りを待ちわびるのが日常だからである。またもし、ここでの「傍人」が致堂だとしたら、夫に対して失礼な態度ではないだろうか。豊かに致堂への愛情を表現している「寄外」詩を多作した、別人格の蘭畹ともとらえかねまい。ここでの「傍人」とは、やはり横山家の侍女であると考えたい。

つまり、蘭畹は習作用の詩として作ったままで、先妻蘭蝶に対しての対抗意識とは言いきれないと考える。むしろ、心のどこかでそういう意識はあったかもしれないが、この意識から脱しつつあったのではないだろうか。しかし、蘭畹があえてこの詩を創作的に作ったと考えられる原因を辿ってみると、致堂の詩に先妻蘭蝶を思う詩があった。蘭畹を娶ってから五年後にあたる文政五年（一八二二）のことである。蘭畹は当時十八歳で、夫への思いに精一杯応えようと必死に漢詩の学びに励んでいたと思われる頃のことである。

蘭畹の主な詩のテーマは、庭園の美しい四季の移り変わりを詠む詩、留守宅で一人夫の帰りを待ちわびる夫を思う詩、邸宅で侍女と過ごしている日常を詠む詩、夫へ向けて我が子の様子を伝える詩、そして一人詩に向き合っている苦吟も思わせる詩など、多様である。蘭畹の詩の中でも異彩を放つものとして、写本『芝艸僊園聯吟』¹⁶には、夫婦で詠んだ詩・聯句が収められている。天保二年（一八三二）から五年（一八三四）にかけて夫婦で詠んだ聯句九首が収められている。蘭畹二十七歳〜三十歳の作品である。

写本『芝艸僊園聯吟』内の一首には、次のような詩がある。

初秋月夕登環翠楼 初秋月の夕べ 環翠楼に登る

今夜涼初好 今夜 涼初めて好し

共登環翠楼 共に登る 環翠楼 致堂

風漪紋似水 風漪 紋は水に似たり 致堂

桂魄影如流 桂魄 影は流るるが如し 蘭畹

羅袖 彈還颺 羅袖 彈れ還た颺る 蘭畹
 芳醪 献且酬 芳醪 献じ且つ酬ゆ 致堂
 卿吟我亦醉 卿は吟じ 我も亦た酔ふ 致堂
 誰会此清幽 誰か会する 此の清幽 蘭畹

韻字楼・流・酬・幽（下平声十一尤）

「環翠楼」は、横山家の邸宅の名称。文化九年（一八一二）、致堂二十四歳の時に命名した¹⁷。「風漪」は、風によるさざ波。「桂魄」は、月の異名。「羅袖」は薄物の袖。「彈」は、垂れる。「芳醪」は、香りのいい酒。「献且酬」は、杯のやりとりをする。「清幽」は俗間を離れた清らかで静かな所という意である。

この聯句は、初秋の夕、横山家邸宅の環翠楼から月見を楽しむ夫婦の聯句である。江戸藩邸に詰めることが多かった致堂と一緒に過ごせる時間は、蘭畹にとつて貴重だったに違いない。この限られた時間を愛おしく感じる互いの思いが、詩句に込められている。致堂は、夫婦で詩を興じることのできるこの時を長年夢見ていた。先妻の蘭蝶とは見られなかった夢を、今こうして、蘭畹と叶えることができた。蘭畹も長い年月を経て、夫と詩を詠み合うことができるまでに自分の詩が向上したことに内心、安堵していたのではなからうか。互いに詩の贈答、応答し合える、至福のひとつときをかみしめている様子がかがえる。

四 夫致堂における妻と妾

致堂の刊行詩集『致堂詩稟』¹⁸巻六には、致堂が蘭畹を娶って五年

目にあたる文政五年（一八二二）の次のような詩が収録されている。

閏正月十四日夜夢 閏正月十四日夜、夢に

與亡妻蘭蝶同賞 亡き妻蘭蝶と同じく

海棠覺後賦二絶 海棠を賞す。覺めし後に賦す。

一笑相携賞海棠 一笑、相携へて、海棠を賞す

花枝滿鬢映壺觴 花枝、鬢に満ちて、壺觴に映る

忽然驚醒五更夢 忽然として驚き醒む、五更の夢

月在紗窓独断腸 月は紗窓に在りて、独り断腸

韻字 棠・觴・腸（下平声七陽）

「一笑」は、一度笑ふ。「壺觴」は、酒を入れる壺と盃。「忽然」は、突然、忽ち起こるさま。「五更」は、午前四時頃。戊夜。「紗窓」は、薄衣を張った窓。

致堂は先にも述べたように、蘭碗を娶ってからも先妻蘭蝶が遺した詩を整理し続け、思い出に耽った。江戸で交流のあった漢詩人・大窪詩仏に『断香集』の撰詩と加評を頼み、蘭碗と再婚後九年目の文政九年には『断香集』を刊行するというほど、致堂の先妻の蘭蝶への思いは強かった。このことから、当然先妻蘭蝶を意識する詩を作らずにいられたなかった蘭碗の複雑な心情はうかがえる。しかし、それは「三、蘭碗 詩の特色② 意欲作への挑戦」で挙げた『続香集』内の習作用の詩「銷夏吟三十首」の中でのたつた一首だけの試みであった。

また、致堂の刊行詩集『致堂二臺』¹⁹巻四にも蘭蝶を偲ぶ一首が掲載されている。『致堂二臺』の刊行された時期は、蘭碗と再婚後十

一年目にあたる文政十一年（一八二八）のことであり、当時蘭碗は二十四歳で『続香集』の詩作に励んでいた時期と重なっている。致堂の先妻蘭蝶への思いはなかなか消えなかったという事実、きつと蘭碗は心痛めていたのではないだろうか。ただ、このことに関する蘭碗の複雑な思いを詠んだ詩は見つからない。

しかし、天保初年、ある出来事が起こる。江戸赴任中の致堂と金沢で留守を預かっていた蘭碗が詩の応酬をしていた頃、致堂が江戸から金沢の蘭碗に宛てた漢文書簡が写本『先考致堂府君遺冊』に収められている。（前半部分省略）

（略）問有れば則ち題を拈り韻を分ち、共に吟詠に耽る。實にこゝろ内の文字友なり。夫れ葛覃かつたん・卷耳けんじ・栢舟はくしゅう・緑衣りょくいは皆な婦人の詩にして、聖人以て国風の首に冠す。余が家已に此の如きを得て、益々詩教の人に益有るを信するなり。庶幾しよきはくは、能く詠絮えいじよの余を以て侍者を薰陶せよ。これを勉めよ、これを勉めよ。²⁰

「問内」は敷居の内、つまり家庭内のこと、ここでは互いに詩を贈り合う友のこと。「葛覃・卷耳・栢舟・緑衣」は『詩経』国風の詩の題。「詠絮」は、女子がよい詩を作ることの喩え。

この書簡の問題点とは、最後の一文「庶幾はくは…中略…侍者を薰陶せよこれを勉めよ、これを勉めよ。」の部分である。ここに挙げられている侍者とは、横山家の侍女、錦雲のことで、致堂が寵愛していた侍妾である。天保元年の頃といえは、蘭碗は二十五歳とまだ若く、致堂と蘭碗の間には当時三人の女兒がいた。致堂からの書

簡にも「間有れば則ち題を拈り韻を分ち、共に吟詠に耽る。實に闔内の文字友」とあるように夫婦の仲は、詩を介していると思われるが良好である。先に引用した『芝艸園聯吟』内の一首からも明らかである。しかし、致堂と蘭畹の間に世継ぎとなる男児がいなかった。このことは一万石の本身の妻として悩ましいことであつたに違いない。

おそらく、蘭畹は致堂からの漢文書簡、とりわけ最後の一文にはきつと戸惑つたのではないだろうか。残念ながら、このときの蘭畹の心情を感じ取れる詩は見当たらない。

「一 夫横山致堂とその家族」の部分でも触れたが、写本『致堂雞肋詩藁』²¹には、致堂が詠んだ傍妾錦雲の詩が収められている。

憶侍姫錦雲

侍姫錦雲を憶ふ

錦機雲段近如何

錦機雲段 近きを如何

愁緒応従別後多

愁緒は応に別後より多かるべし

猶有明年合歎好

猶ほ明年合歎の好き有るがごとし

可憐人似隔銀河

可憐の人は銀河を隔つるに似たり

韻字 何・多・河（下平声五歌）

「侍姫」の姫とは妾のこと。「錦機雲段」は、錦の織機と雲の織物で、牽牛・織女伝説の七夕の天の川を指していると思われる。「合歎」は、男女がよろこびを共にすること。

この詩に続いて、致堂は「自画の蓮花図に題す。時に侍姫錦雲娘すること有り」と題して、蓮の花の散つた後、珠に実があるように、

ますます房に実が入っていると寵愛する侍姫つまり妾の錦雲との間に子どもができたことを喜ぶ詩を詠んでいる。その後錦雲は女美珠を出産するが、美珠は天保四年秋に歿し、後を追うように錦雲も歿した。『海棠園静好閣遺稿合本』²²の『海棠園遺藁』には、致堂が錦雲の死を悼んで詠んだ五言古詩「悼姫人錦雲」（姫人錦雲を悼む）が収められている。詩題に賦される致堂の自注には、「樸質無文、志は只だ繡を善くするにあるのみ。」（原漢文）と書かれる。「樸質」は素直で律儀。「無文」は文雅のたしなみがないこと。「繡」は刺繡。

錦雲には文学の才がなく、刺繡を好んだと致堂は言っているが、揖斐氏も先行論で「致堂の督励で蘭畹は錦雲に詩作を教えようとしたのであろうが、おそらくは物にならなかったであろう。妻だけではなく、侍妾とも詩作趣味を共有しようとした致堂のもくろみは成功しなかった。：中略：致堂と蘭畹との間には瓊翹・瓊藥という二人の女兒がいたが、家督を継ぐことのできる男子はいなかった。そのことは時に正妻蘭畹の立場を弱くするものであつたかも知れない。」と述べている。

致堂は、錦雲のことを「樸質無文」と、揖斐氏も「物にはならなかったであろう」と言っているが、おそらく錦雲は、横山家に仕えている侍女であつたということで教育を受けておらず、文学的な素養がまったくと言っていいほどなかったのではないだろうか。錦雲は蘭畹によく従い、波風が立つようなことはなかったという。氣立てはよかつたのであろう。このことは、先に挙げた致堂の「悼姫人錦雲」の詩に収められている。

蘭畹は、錦雲の歿した翌年の天保五年（一八三四）に嫡子の政和を生んだ。夫婦で世継ぎの男児の誕生を喜びあったわずか二年後の天保七年（一八三六）一月、致堂は四十八歳で江戸藩邸にて歿した。蘭畹は三十二歳という若さで未亡人となってしまった。

五 致堂歿後の蘭畹

夫致堂を失った蘭畹は、その喪失感を写本『静好閣遺草』²¹に収める七言絶句五首の連作に詠んでいる。

丁酉春日作

（五首の中二首目）

政和曰天保乙未之秋先考于役江戸明年丙申正月卒于江戸孺人聞
訃不言不語閉戸而臥至丁酉之春方起乃言詩即此數首也

政和曰く「天保乙未の秋、先考江戸に于役し、明年丙申正月、江戸に卒す。孺人、訃を聞きて、言はず語らず、戸を閉ぢて臥す。丁酉の春に至りて方に起き、乃ち詩を言ふ。即ち此の數首なり。」²⁵

「天保乙未」は、天保六年（一八三五）「先考」は、亡くなった父。「丙申正月」は、天保七年（一八三六）一月「孺人」は、妻。「丁酉」は、天保八年（一八三七）のことで蘭畹は当時三十三歳。

又

書卷慵開掩翠幃 書卷 開くこと慵し翠幃を掩ふ
不看林苑綠將肥 看す 林苑 緑の將に肥えんとするを
傷情尤是無由写 傷情 尤も是れ 写すに由無し
人世春婦人不帰 人世 春は帰るも 人は帰らず

韻字 幃・肥・帰（上平声五微）
「書卷」は、書物書籍。「慵」は、物憂い。「掩」は、覆う。「翠幃」は、翠の帷。「傷情」は、心痛する。「春婦」は、春が再び帰ることを。

書物を開くのももの憂く翠のカーテンを閉じたまま、致堂を亡くした喪失感に打ちひしがれている。「慵開」「不看」「無由写」と何事もできないということをして詩に読み、夫を亡くした深い悲しみを詩にこめていく。そして第四句目の「春はめぐってくるけれど、人は帰って来ないのです」と、今生ではもう会えないということ自身自身に言い聞かせている。

夫致堂亡き後、偲びつつ詠んだ蘭畹の詩、こちらにも『静好閣遺草』に収められている。

初秋偶成

小閨無伴倚窓櫺

小閨 伴無く 窓櫺に倚る

紈扇揺來手不停

紈扇 揺らし来たつて 手停めず

記得當時長夏夜

記し得たり 当時 長夏の夜

中庭相共看双星

中庭 相共に 双星を看るを

韻字 櫺・停・星（下平声九青）

「窓櫺」は、窓の連子窓の格子。「紈扇」は、白い練り絹で作った団扇。「双星」は、牽牛星と織女星をいう。伴侶を亡くした蘭畹であるが、夫と過ごした七夕の夜を回想している。

夜坐

空齋人静欲初更

空齋人静かにして初更ならんと欲す

起坐探詩対短檠

起坐して詩を探り短檠に對す

恰も餅中梅蕊放

恰も餅中に梅蕊の放つ有り

玲瓏一朶與心清

玲瓏たる一朶心とともに清し

韻字 更・檠・清 (下平声八庚)

「空齋」は、がらんとした書齋。「初更」は、夜の八時頃。「短檠」は、丈の低い燭台。「梅蕊」は、梅の花。「玲瓏」は、冴えて鮮やかなさま。「一朶」は、一枝 また 一枝の花。

蘭畹は夜燭台の下、静かな書齋で詩を作っている。蘭畹の日常を読んだ詩といえる。花瓶に挿した梅の花が開いたこの瞬間を、蘭畹自身の心情と合わせて清らかであると表現している。

蘭畹は致堂の死後、深い悲しみの中におり、詩が詠めずにしたが、再び詩作をするようになった。これらの詩は、写本『静好閣遺草』の後半に収められている。致堂を思い出す詩の他、致堂と蘭畹との間に生まれた女兒が早世しているので、その女兒を哀悼する作詩など家族のことを詠んだ詩等、蘭畹の日常を詠んだ詩で構成されている。これらの詩からは致堂を失った悲しみはなかなか癒えないが、徐々に落ち着いてきた様子を感じ取ることができる。「初秋偶成」の詩の第三句目に「記し得たり 當時 長夏の夜」とあるように、致堂と過ごした日々が追憶されている。また「夜坐」を詠む蘭畹の心情は、花瓶に活けてある梅の花が開く瞬間の美しさと重ねられており、それまでの人生が前向きに回顧されているように思われる。

おわりに 蘭畹 詩の三変

はじめに提起したが、蘭畹にとって詩とは一体何だったのだろうか。三段階に分けられるように思う。

当初、蘭畹は、致堂への気持ちに精一杯応えようと懸命に詩作したが、常に苦しみを伴っていたと考えられる。十三歳で嫁いでからというものの致堂に言われるままに詩作をしていたのではないだろうか。実際、致堂は江戸から書物を送り、詩作のための学びも蘭畹に課していた。本稿では紹介できなかったが、『続香集』の巻上の作品には、苦吟する詩が多く収められていることから窺える。

「三 蘭畹 詩の特色② 意欲作への挑戦」で取りあげた韻目をすべて変えて作った連作という意欲作は、おそらく致堂から課されたものではないだろうか。

しかし、年月の経過と共に、徐々に蘭畹の詩も熟達し、致堂に、そして周囲の人に認められるようになってきた。当時流行した自分の心情をストレートに詩に託すという詩風も追い風となって、徐々に楽しくなったのではないかと思われる。ただ蘭畹は自身の武士の妻であったので、何かと制限もあったはずだ。自由にならない生活の中にありながらも、詩を詠むことによって、自分自身を解放することができたのではと考える。それは、詩の効用と言っても過言でないだろう。致堂と結婚してからというもの、必死に漢詩の手ほどきを受け、詩集を刊行するまで十七年間と長い年月を要したが、夫致堂に認められたことは、妻としての大きな自信となったに違いない。

い。先にも述べたが、『統香集』を出版した天保五年（一八三四）は世継ぎとなる嫡子政和も誕生し、蘭碗にとつてこの上ない喜びだったと思われる。自分の中で意識していなくても、致堂が抱いていたであろう「先妻蘭蝶の身代わり」ということから、ようやく解放されたのではないだろうか。掛斐氏は先行論で「蘭碗二十四歳の頃を境に身代わりとしてではなく、蘭碗自身として存在し始めたのかもしれない」としているが、二つの慶事が重なったこの三十歳の時を境に、蘭碗は、蘭蝶の身代わりではない致堂の妻として、堂々と胸を張って、本当の意味で自信が持てるようになったのではないかと考える。

最も注目すべき点は、次の時期『静好閣遺草』の詩を詠んだ頃、天保四、五年頃（一八三三、一八三四）→嘉永四年（一八五一）と言えよう。蘭碗は嫡子政和の養育に心血を注ぎつつも、致堂との思ひ出等を詩に詠むことを忘れなかったのである。致堂と死別してからもなお詩作を続けることこそが、致堂が何よりも喜ぶことと思つて、詠み続けたのであろう。蘭碗の人生を紐解くと、致堂が忘れることがなかった先妻蘭蝶に対する思い、寵愛した侍妾の錦雲のことなど、詩に詠むことはなかったが、辛く悲しい思いもあったであろう。しかし、大切な人が亡くなるということによって、すべてが美化されるというのを蘭碗は心から感じつつ、致堂と過ごした楽しかった日々を回顧することで、日々詩作に興じたのではないだろうか。蘭碗は致堂を失ったことで、先妻蘭蝶を失った致堂の心情をようやく理解することができたのでなかったかと思われる。

参考文献

- 石川県教育会金沢支会編纂『金沢市教育史稿』 一九一九年三月
日置謙『加能郷土辞彙』 北国新聞社 一九五六年八月一日
北国新聞社編集局『加能女人系』（上）
掛斐高『江戸詩歌論』 北国新聞社編集局 一九七一年十月一日
門玲子『新版』江戸女流文学の発見 光ある身こそ九思ひなれ』 汲古書院 一九九八年二月
掛斐高『海棠の花蘭の香り―近世後期漢詩における夫と妻―』近世文学の境界』内 岩波書店 二〇〇九年二月二十四日

注1 掛斐高氏蔵の写本は次のようなものがある。

- 『先考致堂府君遺文』、『海棠園・静好閣遺稿合本』（『海棠園遺藁』、『静好閣遺草』）、『先考致堂府君遺冊』（『先考致堂府君遺藁』、『芝艸倦園聯吟』、『漱玉菴詩餘』、『致堂雞肋詩藁』、『致堂書牘』）、『静好閣遺藁』、『静好閣百律』、『詩筒往復集』、『芝艸倦園聯吟』
- 『復刻』日本地震資料第三卷 天明四年より弘化四年まで』内の（金龍公記資料）によれば「金澤正月廿一日夜地震五時又五時半為寛政十一年以來之大震正月廿二日地震、小松城壊敗尤甚」との記載あり。
- 『加能女人系』によれば、嫡子政和が身辺を雑記した『政和半世經歷之記』の中で蘭蝶のことを「政孝の嫡妻桂子（津田政本野長女にて正室雍子の腹にして政孝のいとこなり）は、二十一歳時妊娠八か月目に地震にあい、病いを起こし、早産す。子は女兒でわずかに声をあげて死す。当時まだ医師の手術法が完全ではなく、へその緒を強く引いて切ったところ母も命を失い、そのまま死去した」と記す。
- 『海棠園合集』（二巻一冊）文化十二年（一八一五）に出版された夫致堂の詩百首と亡妻蘭蝶の遺詩百首との合集。蘭蝶が詠んだ夫を思う「寄外」詩を一首取める。
- 北国新聞出版局『加能女人系』一九七一年十月二百八十四頁。

- 6 嫡子政和の誕生の前に女兒が生まれている。また「政和半世経歴之記」には、「父（政孝）は最初男児を設けたが二歳で死んだ。そのあとに自分が生まれたのだが、そのころ母（蘭唄）は病氣にかかり、妊娠九か月目で自分を生んだ」と記す。
- 7 揖斐注1著 写本『先考致堂府君遺文』内に収める。訓説は揖斐高氏による。
- 8 揖斐高『近世文学の境界』内「海棠の花 蘭の香り―近世後期漢詩における夫と妻」岩波書店 二〇〇九年二月二十四日 七六頁。
- 9 日置謙『加能郷土辞彙―北国新聞社 一九五六年八月一日 九五〇頁。
- 10 石川県教育会金沢支会編纂『金沢市教育史稿』一九一九年三月 六五五頁。
- 11 常陸の人。父に従って江戸に出、初め、山中天水に儒学を学び、のち山本北山や市河寛斎のもとで詩文を学んだ。寛政四年（一七九二）頃、柏木如亭と二瘦詩社を興し、文化三年（一八〇六）神田お玉が池に詩聖堂を営んで、菊池五山と共に江戸詩壇の双璧となった。遊歴を好み、地方にも多くの門人を残した。墨竹画も能くした。
- 『江戸詩歌論 七二二頁には、「致堂三十歳の時、詩仏門の僧東林と詩の交わりがあったほか、詩仏と旧交のある林孫坡の上司でもあり、そうした関係から詩仏に詩を寄せるようになったのであろう。」と記す。詩仏は、『海棠園合集』の序文、『続香集』の序文、そして蘭麝の遺稿『断香集』においては、選詩と加評、そして序文を書いている。
- 12 江戸の人。家は富裕な幕府御家人。山崎桃溪に句読を受け、独学で四書五経を修め、のち井上金峯の折衷学に共鳴し、もともと経学に優れていた。寛政異学の禁に反対論を唱え、異学の五鬼の一人に数えられた。門人に大窪詩仏・大田錦城・朝川善庵らがいる。
- 13 門玲子『新版 江戸女流文学の発見 光ある身こそくるしき思ひなれ』藤原書店 二〇〇六年三月三十日 二一三頁。
- 14 揖斐注1著 以下同。
- 15 揖斐注7著 以下同。
- 16 嫡子の政和が写し、編集した写本である。
- 17 揖斐注1著『先考致堂府君遺文』内「名楼記」に記載あり。
- 18 『致堂詩藁』（八卷四冊）は文政八年（一八二五）に出版された致堂の最初の詩集。
- 19 『致堂二藁』（八卷四冊）は天保四年（一八三三）に出版された『致堂詩藁』の続集。
- 20 揖斐注8著 八一頁 以下同。訓説は揖斐高氏による。
- 21 揖斐注1著 写本『先考致堂府君遺文』内に収める。
- 22 揖斐注1著『海棠園・静好閣遺稿合本』（二冊、三四丁）とは、致堂の遺詩を嫡子政和が編集した『海棠園遺藁』天保三年（一八三二）～天保六年（一八三五）の詩百十首を取めたものである。『静好閣遺藁』は本文中に記載あり。
- 23 揖斐注8著 以下同。訓説は揖斐高氏による。
- 24 揖斐注1著『静好閣遺藁』（二冊、一八丁）天保四、五年頃（一八三三～一八三四）～嘉永四年（一八五二）の蘭唄の詩九十九首を取める。
- 25 揖斐注23著 以下同。訓説は揖斐高氏による。

（うしだ・きぬ 大学院博士後期課程在学）